新刊紹介

For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be thought expert in both.

清水安三著

『周再賜先生の生涯』

（賜千会、B6判
三三六頁、一、〇〇〇円）

大正十一年（一九二二）四月に同志社大学法学部に助手として職を得て間もないころ、神学部の前で竹中勝男教授に偶然にも紹介されたのが、周再賜先生であった。しかも、周先生夫人が千代さんであることを知って驚いた。勝見千代さんは、わたくしが仙台旧制第二高等学校生のころ、郷里から度々往復の途次、必ず立ち寄った足利市の池田医院の叔父・叔母の二階に下宿していて、足利市高等女学校の英語教師として評判のよい若々しい教師であった。わたくしが、同志社旧図書館の四階の法学部研究室に通っていたころ間もなく、周先生は、海老名総長と教育上の意見が合わないので同志社を去った。前橋市の共愛女学校校長となったと聞いた。わたくしの叔父住谷天來は、明治時代に共愛女学校創立当時からの協力者であり、わたくしの姉ヒデ子は共愛の卒業生であり、周先生の前の青柳新米校長の令息秀夫君は前橋中学・仙台二高・東京帝大を通じての親しい学友で、愛知県知事・参議院議員を経て現在までなお親交がある。周先生夫妻との因縁はこれだけにすぎないが、印象は鮮やかである。

その周先生の伝記が、親友である桜美林大学長の清水安三先生によって書かれた。清水先生は、「中江藤樹伝」や「おうびりん物語」の著書によってひろく文名をもって知られ、その内容については好評があるが、今度の周先生の伝記を読了して、わたくしは、前書に劣らぬ深い感銘を覚えた。周先生の伝記は、先生の堅い信念のバックボーンと、強い性格による人間関係になかなか複雑さがあり、適当の伝記著者を見出し難いところ、結局クラスメートで先生の昵懇の清水先生が懇請された。まさにその人を得たというべきである。生いたち（第一章、二章、三章）から、同志社助教授時代（第四章）を経て、先生の生涯の教育活動としての前橋共愛女学校校長時代の教育経営の苦難の時代を中心に、第五章が詳細にあてられている。第六章、七章、八章は、晩年の周先生についてであるが、全篇を通じて清水先生の友情と尊敬と真実とが溢れ、全生涯を掌に指すがごとく詳細、克明に叙述されている。著者の僚友であるのに「周先生は……」というような敬愛をもって貫かれた伝記に、わたくしは襟を正して脱帽した。周先生の女学校教育と経営についてのキリスト教魂を打ち込み毅然たる信念と態度に終始した真実の姿は、さまざまな事実を織り込んで美事に浮き彫りされている。わたくしの近頃の読書生活にあって、興味あり、かつ教えられた好著として、多くの同志社人に推薦したい。

（住谷悦治・前同志社総長）

吉田曠二著

『加藤弘之の研究』

（新生社、A5判（三二四頁、六、〇〇〇円））

大学教授など、一部の人のみを学者と称するのであれば、著者は、およそそれとは縁遠い世界の人である。すなわち、彼は、朝日新聞社に籍を置くサラリーマンにすぎない。その著者が、寸暇を惜しんで勉強を続けられ、立派な研究書を出版されたことに讃辞を贈りたい。吉田氏は、高校から大学院まで同志社で学ばれた校友。その学問的情熱は、田畑忍博士のご指導のもと、いつしか日本近代政治思想史に注がれ、とくに主たる関心は、加藤弘之研究に向けられていた。それは、田畑博士の研究をうけ継がれ、より多面的に加藤の思想を把握せんとしたためであろう。また、加藤が、「『主義』の人であり、支配的なイデオロギーを持ちつつも……略……純潔の研究者」（本書三一八頁）であり、「直接原典から高度な西洋思想をわが国に導入したパイオニア的思想家」（同頁）であることに、著者が魅惑されたからでもあるようだ。

加藤は、出石藩の人。幕府や明治政府の官僚、大学総長、貴族院議員として活躍した。その略歴が、かれの思想形成に多大な影響を与えたものと、著者は推察されている。すなわち、加藤の思想は、初期には天賦人権論、後期には社会ダーウィニスムを基調としているが、つねに権力的、政府官僚的立場において、思想的営為をなしていたとの論証に力を注いでいるようだ。

だから、加藤は自由民権派とは対決する理論家として活躍したし、日清開戦の頃には、「強者の権利の競争」を刊行し、社会ダーウィニスムに基づく権力国家思想を展開する。それに、利己的進化思想の到達点として、戦争や皆徴兵制度を肯定し、国家観の最終目標を忠君愛国に置くに至ったという。基・仏両教の世界主義を反国家的なものとして批判したのも、この目標にそわぬためであるという。著者は膨大な文献資料や、新史料を駆使し、各章でこれらの説明をされている。また、政治思想を異にする植木枝盛が、国法汎論など加藤の著・訳書に学んでいたことや、「強者の権利の競争」が、まずドイツ文で執筆され、ついで邦文で一気に脱稿されたことなど、多数の新事実を紹介し、加藤弘之研究を極めて豊かにされている。

とくに、キリスト教批判にかかわる一章は、同志社人の熱読すべき箇所である。加藤は、キリスト教の非国家主義、世界主義を攻撃した。かれの著書「吾国体とキリスト教」は、この宗教に対する挑戦状であったと著者は詳述され、ギューリック、海老名弾正、加藤直士、芦田慶治、浮田和民など、同志社関係者との論争が、論点を明確にして紹介されている。しかもその批判は、国体との共存を打ちだした仏教に対する批判とは異質のものであったことも強調されているようだ。その他、加藤が当初から強烈な反共思想にもえていたことや、保守的なドイツ学を受容して、かれの政治思想が形成されたプロセスも、きわめて詳細精緻に分析されている。年譜や研究文献一覧、二つの新資料などは、加藤弘之研究の前進に大いに役立つことだろう。ぜひとも一読を願いたい。（萩原俊彦・香里中・高教諭）

貞方敏郎編著

『同志社交響楽団五十年誌』

——写真と文で綴る一私学オーケストラの歩み——

（同志社交響楽団・同OB会、B5判、一六〇頁、非売品）

同志社交響楽団は、一昨年の昭和五十年に、同志社創立百周年と年を同じうして、栄えある五十周年を迎え、盛大な記念総会の祝典を挙げ、全国五百名のOBの間から記念募金をして得た資金により、記念行事としてベートーベンの第九交響曲を公演するとともに、楽団沿革史の編さんに着手し、昨年暮れに完成して、全国のOB、現学生部員及び関係諸団体に広く頒布した。内容は、(1)同響五十年史、(2)随想（各年代から寄せられた「青春の思い出同響」の文集）、(3)座談会（創設以来の新旧OBに学生部員を混じえての同響史の裏話）、(4)二十頁に及ぶ同響五十年の演奏活動の詳細な年表、以上四部分から成る。誌の主部を成す沿革史と編集主幹を、創設当初から今日まで本学園に在って、五十年間を同響とともに歩んだ貞方敏郎先輩（昭八大英卒、大学文学部教授）に委嘱し、十名の編集委員が一年有半の努力を尽くして作製したものである。写真と文で綴る一私学オーケストラの歩みの記録であり、一般読物としても興味ある豪華版である。アート紙一六〇頁、写真一二〇枚余。非売品。但し、一般希望の方には実費送料を含めて一、〇〇〇円でゆずっている。

申込先　「京都市下京区四条通河原町東入（〒六〇〇）林邦男方　同志社交響楽団OB会」

同志社関係出版物

新島　襄（岡本清一著）	同志社大学出版部	¥　500
新島　襄（魚木忠一著）	〃	¥　300
髪の掠奪（岩崎泰男訳）	〃	¥1,000
同志社歳時記（生島吉造・松井全編）	〃	¥　600
〃　（続）	〃	（近日発刊）
同志社設立の始末 同志社大学設立の旨意（新島　襄）	学校法人同志社	¥　100
同志社90年小史（社史々料編集所編）	〃	¥3,000
同志社歌集	〃	¥　500
新島襄書簡集（編者代表・住谷悦治）	岩波書店	¥　210
同志社で話したこと書いたこと（久永省一著）	洛北書房	¥　750
イエスの生涯と思想（高橋　虔）	教文館	¥　350
憲法と平和（田畑　忍）	〃	¥　350
人生、友情、学問（上野直蔵）	〃	¥　350
日本経済の源流（住谷悦治）	〃	¥　350
近代日本文化とキリスト教（高道　基・辻橋三郎）	〃	¥　350

取扱・同志社収益事業課